



67年ぶりに家族のもとへ



松本實男さんら遺族の皆さん ↑ ↑写真左から、藤原市長、松本實男さん、イーサン・フブラーさん、山田久志さん。



## アントニーさんからのメッセージ

長い年月はかかりましたが、喜蔵さんの日章旗を無事にお返しすることができて、とても嬉しく思います。日章旗の重要性を理解していなかったことをお許しください。そうでなければ、もっと早く（日章旗を）返していたことでしょう。日章旗をお返しすることで、喜蔵さんの魂、ご家族、友人や関係する皆さんの幸せをお祈りします。私は、喜蔵さんの日章旗が父の手に渡った経緯を知りたいのですが、残念なことに、父は生前日章旗について話すことはありませんでしたし、他の家族も日章

旗を持っていたことさえ知りませんでした。私にとって唯一の事実、それは喜蔵さんの魂が家族の元に還ったことであり、それが私の喜びです。I am very glad to know that Kizou San's flag is being returned home after so long. I am sorry to have been ignorant not understanding the significance of the flag; otherwise it would have been returned sooner. I hope the receipt of the flag brings peace to Kizou San's soul, his family, friends and all concerned. I wish I knew the story behind my father's possession of Kizou San's flag. Unfortunately he never spoke about it and no one else in the immediate family remembers anything about it either. The only peace of mind I have been able to find is in the knowledge that Kizou's spirit has been returned home.

## 特集 善意のリレー ~日章旗が還るまで~



故 松本喜蔵 氏  
大正11年8月6日、西有家町慈恩寺休場に生まれる。

昭和20年7月7日にビルマ（現在のミャンマー）で戦死した松本喜蔵さんの日章旗が、喜蔵さんの弟である松本實男さんら遺族のもとへ引き渡されました。10月19日の引き渡し式には松本實男さんのほか、喜蔵さんの遺族30人も出席。藤原市長立ち会いのもと、フブラーさんから、實男さんら遺族に日章旗が手渡されました。日章旗を手にした實男さんが、「言葉になりません」と声を詰まらせると、遺族の間からはすすり泣く声が聞こえました。実に67年ぶりに、日章旗が遺族のもとに届いたのは、運でも偶然でもありません。関わった皆さんの善意のリレーが、そこにありました。



## 風物語 ~Kizou San's Flag~ 日章旗が還るまで

「今年3月に、私は、日本に行く用事があるんだがね」

「日本語では「テヅマリ」って言うんだっけ」イーサン・フブラーさんは、友人のアントニーさんから頼まれた日章旗の持ち主を探していた。だが、すぐに捜索は行き詰まってしまふ。慣れない土地での捜索にはおのずと限界があった。

焦燥感に駆られるフブラーさんの前に、ある日、一人の日本人が現れた。

山田久志さん。恰幅のよい上品な彼とは、とあるパーティーで知り会った。フブラーさんの協力依頼に、彼は流暢な英語で答えた。

「OK, I will. We wish they will be found immediately. (オーケー、やってみましょう。ご遺族がすぐに見つかるといいですね)」

「武運長久」、「一死奉公」などの文字が並ぶ日章旗。

山田さんは、その中から「休場青年会」、「喜蔵君頑張」の文字に着目した。旗の持ち主は「喜蔵」さん、「休場」は地名ではないかと考えたのだ。

瀬チエオさんにそういった。すすり泣く声が会場を満たす10月19日、67年にわたる喜蔵さんの日章旗は在るべき場所へ還り、その旅は、終わりを迎えた。

「当時は、戦争に行くのが当たり前。死んで帰ることも珍しくない時代だったけど、身内がその死を悲しまないことはなかったよ」

松本さんの日章旗は、還って来た。だが、喜蔵さんの命が蘇ることは決してない。

戦争は、大切な人の命を奪い、遺族は、60年経たいまでも、その悲しみを重く背負って生きている。これまでも、これからも、戦争が起こる度にこの悲しみは繰り返される。

「戦争の悲劇」日章旗は、私たちに、はたらくことなく、知らしめ続ける。

10月4日、南島原市にも、山田さんから手紙が届いていた。手紙を開封したのは、福祉課の江越嘉夫さん。江越さんは、日章旗に書かれたいくつかの名前のうち「松本實男」の名前に目を止めた。休場自治会は彼の近隣の自治会。「これ、うちの近所の人の、旗だ」

「姉やん！兄やんが帰って来たぞ」引き渡し式で、日章旗を受け取った實男さんは、開口一番、姉・一ノ



←日章旗を手にし、涙ぐむ一ノ瀬チエオさん